

思考と技術
と対話の
学校





Tokyo Art Research Lab
思考と技術と対話の学校
基礎プログラムガイド

「ブーム」から「営み」へ 森司……………02

思考と技術と対話の学校とは……………04
基礎プログラム 思考編 技術編 対話編

思考編 (2015年度)……………08
1年の流れ……………10
後期課題……………16

技術編 (2015年度)……………18
1年の流れ……………20
後期課題……………24

スクールマネージャー座談会……………26
受講生インタビュー……………30
図書室……………32

「ブーム」から「営み」へ

アートプロジェクトは、この15年ほどで新たなフェーズに入りました。いまや、アートマネージャーは、キュレーターやアーティスト同様に専門的な職能。まちなかでアートプロジェクトを行うだけの「地域アートブーム」は終わりを告げ、アーティストやプロジェクトメンバー、そして地域の人のなかに眠る個々の知見を共有し、つなぎ、仕組み化することで持続可能な「営み」をつくることが求められています。

ブームを営みにするためには、「時間」が必要です。

相撲の世界には、「3年先の稽古」という言葉があります。力士としての^{からだ}身体づくりや技の習得、怪我に強い体質などは決して短期間で身につくものではありません。将来、関取や大関、横綱を目指すためには、目先の勝負に捉われず、3年先を見据えて稽古に励むことが大事だとする考え方です。

それは、アートマネージャーにも同じことが言えるのではないのでしょうか。

つまり、かけるべき時間をかけて悩んだ経験によって「身体で考えられる」ようになり、自信になるのだと考えます。そして、それはきっと困難を事前に防ぐ「しなやかさ」や現場の不条理に対する「タフさ」にもつながるでしょう。

そうした思いから、2014年に3年間みっちりアートマネージャーとしての「基礎だけを学ぶ学校」を開校しました。基礎力の幹は、自分で問いを立てることができる「技術」です。その技術を獲得するために受講生が「思考」の土壌を耕し、その技術

を持ってアーティストや地域など異なる他者と「対話」をする。学校の名前は、わたしたちの想いとアプローチそのものです。

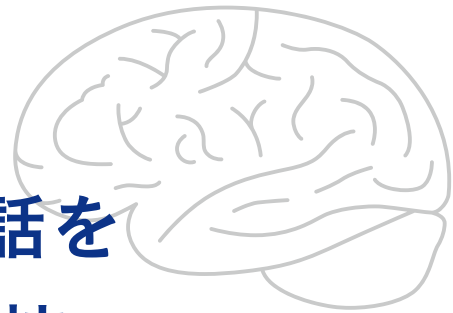
多彩な講師陣と出会うプログラムは、共通認識や理念をつくる「言葉の獲得」の助けとなります。その言葉が、必ずやアーティストを、地域を動かすものとなるはずです。また「学校」という枠組みは、個人的な興味・関心よりも広い分野に触れる機会を生み、「同級生」による学び合いが、さらに学びを促進すると考えています。

これまでアートプロジェクトに求められてきたのは、地域の活性化やイベントの集客など人や場を「応援する(Cheer)」ものでした。しかし、少子高齢化社会の21世紀においては、人や場を「ケアする(Care)」アプローチも必要となってきました。社会はどんどん動きます。現在に応答するのはもちろんのこと、未来を予見するような思考と実践を。近い将来、一緒にプロジェクトを動かしていく、持続していく力のあるアートマネージャーが育つことを期待しています。

森司

「思考と技術と対話の学校」校長

思考と技術と対話を 「身体化」する学校



アートプロジェクトは、時代の要請を反映し、可視化するものです。

少子高齢化を筆頭に、様々な価値観や社会構造の変化が起きているなかで、

いままさに社会に対する応答力が求められています。

そのようなアートプロジェクトを動かす人材に必要なのは「思考」「技術」「対話」の力だと考えます。

学びはすぐに手に入るものではなく、意識的に時間をかける、

つまり「問いを抱えたまま過ごす」ことが大切です。

来たるべき時代に必要なアートプロジェクトを考え、かたちにするために。

「思考と技術と対話の学校」は、アートプロジェクトを動かす力を「身体化」する学校です。

本校の「基礎プログラム」では、3つの基礎力（「思考」「技術」「対話」）を3年間かけて養います。

1年目の「思考編」は、第一線で活躍するアートマネージャーに出会い、

アートプロジェクトが手がけることのできる領域イメージを拡張する考え方を学びます。

2年目の「技術編」は、マネジメントの実務能力をスキルアップ。

プロジェクトの始まりから終わりまでのワークフローを学び、

業務の必要性を理解した上で、現場で求められる技術を磨きます。

3年目の「対話編」は、多様な人々と対話を重ねながら

実際にアートプロジェクトの企画・運営を行うことで、実践を通してこれまでの学びを検証します。

学びを深める「基礎プログラム」の仕組みと特徴

1 講師100名との出会い

P.10 P.20

第一線で活躍するアートマネージャーやアーティスト、多彩な分野の研究者が、現場の生の声を届けます。3年間を通して、約100名の講師陣との出会いは、大きな財産となるはずです。

2 スクールマネージャーによるサポート

P.9 P.19 P.26

現場経験豊かなスクールマネージャーが、各グループを受け持つ担任制。受講生の日々の学びに伴走します。

個人面談

1年間の到達目標や、今後のキャリアプランなどについて話し合う。

コーディネート

希望者に対して、アートプロジェクトの現場見学やボランティアなどをマッチング。

フィードバック

課題の授業レポートへのコメントや、予習・復習でのフォローなど随時対応。

情報提供

講師情報や旬なアートプロジェクト情報などを共有。

3 多様な仲間との学び合い

P.16 P.24 P.30

クラスには、職業や年齢、現場経験など様々なバックグラウンドを持つ受講生が集まります。グループワークを通して、その違いを実感し、ともに学び合う場が生まれます。

4 アートプロジェクトの図書室

P.32

教室には、TARL (Tokyo Art Research Lab)が研究・開発してきた教材やアートプロジェクトの関連本が納められています。ドキュメントブックやノウハウの詰まったマニュアル、評価にまつわるものなど多岐にわたる内容。いつでも図書室として、知財を活用することができます。

3つの基礎プログラム

アートプロジェクトを動かす人材に必要な3つの力を育むプログラムです。

[平成27年度実施概要]

日程	[前期] 6回 + [後期] 5回 (すべて土日開催、午前の部 [10:15～13:00] + 午後の部 [14:00～17:30] で構成)	会場	アーツカウンシル東京ROOM302 (東京都千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda3F)
対象	思考編 : アートプロジェクトの運営に関わっている人、関わる意思のある人 技術編 : 思考編修了生、またはアートプロジェクト運営経験者(各30名程度)	受講料	一般60,000円/学生40,000円
受講形式	通年(原則全日参加)	主催	東京都、アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)
		企画協力	一般社団法人ノマドプロダクション

1 思考編

アートプロジェクトを動かすための 考える力を養う

「思考」は、社会動向を見据え、どのようなプロジェクトが必要か、また、そのために必要なオペレーティングシステム(OS)を考える能力のこと。授業や課題を通して、「なぜアートプロジェクトを行うのか?」「社会的な課題に対してどのようにアプローチするのか?」「自分はどのように関わりたいか?」など、問いを立てながら学んでいきます。

知る

- アートの知識とアートプロジェクトのイメージ
- 社会を捉える視点(地域、コミュニティ、多様性、身体、食、仕事など)
- 情報のインプットとアウトプットの仕方
- 現場の仕事(事務局、アートプロジェクトを支える人々、作品のインストール、他分野との連携など)

考える

- 私は、なぜアートプロジェクトをやろうとしているのか?
- 私は、どのようにアートプロジェクトと関わるのか?
- 社会における私の興味・関心や問題意識はどこにあるのか?

対応プログラム

- 👁️ = 仕事を知る
- 💡 = 思考を深める
想像を広げる
- 🗨️ = 現場に出会う

準備する

「事業計画書」をつくる

事業を実施する

2 技術編

企画をかたちにするための スキルを身につける

「技術」は、会議の設定の仕方からプロジェクトの現場の仕切り方といった実務、記録をアーカイブ化し未来へ発信すること、また評価までのマネジメントフローなど、様々な局面で必要とされる事柄を遂行する能力のこと。「演習問題」を通して、少人数のグループワークを実施。複数のケースを想定しながら繰り返しトレーニングを行います。

知る

- 現場の仕事(事業設計、資金調達、広報・PR、記録・アーカイブ、報告・検証・評価など)
- 現場の実務(書類の読み方、事業計画書[企画書・予算書・体制表・スケジュール]のつくり方、共通言語の獲得の仕方、リサーチ手法、会議の仕方、調整の仕方、協働作業の進め方、プレゼンテーションのやり方など)

考える

- 私は、チームでどのような役割を担うのか?
- 私たちは、誰に向けてアートプロジェクトを行うのか?
- 私たちは、誰とどのようにアートプロジェクトを行うのか?

かたちにする

- 運営体制(組織の位置づけ確認、役割分担、進行管理、調整、交渉など)
- 企画(事業計画書作成)

対応プログラム

- 👁️ = 仕事を知る
- 🏗️ = 企画をかたちにする

3 対話編

チームでプロジェクトを 実施するための対話力を磨く

「対話」は、「思考」「技術」を鍛えるための必須能力。プロジェクトの情報を共有し、様々な立場の人と協働し、新たな展開を切り開くための力です。実際にアートプロジェクトの企画・運営を通して、プロジェクトを実現させるために調整や交渉など対話力を磨きます。

知る

- アートを捉える視点(美術史、哲学、社会学、科学など)
- アーティスト(思考、作品)
- アートプロジェクトを取り巻く環境
- アートプロジェクトが直面する課題
- 現場の仕事(事業設計、資金調達、広報・PR、記録・アーカイブ、報告・検証・評価、リスクアセスメント、危機管理、雇用問題、法律、インターン・ボランティアマネジメントなど)

考える

- 私は、いまでのようなアートプロジェクトをかたちにしたいのか?
- 私は、どのような技術を強みにアートプロジェクトと関わるのか?
- 私たちは、どのような場でアートプロジェクトを行うのか?
- 私たちは、誰とともに、誰に向けてアートプロジェクトを行うのか?
- 私たちは、アートプロジェクトにおいて何に挑戦するのか?

かたちにする

- 運営体制(プロジェクトの設定・位置づけ確認、情報共有の徹底、共通言語の獲得、座組み設計、ネットワークなど)
- 企画(事業実施計画書作成)

動かす

- 準備(プレインストーミング、情報収集・リサーチ)
- 運営(事務局、進行管理、資金調達、会場手配、人材手配、許認可申請、リスクマネジメントなど)
- 広報・PR、プレゼンテーション
- 記録・アーカイブ、ふりかえり、報告・検証・評価

[平成28年度開校予定]

思考編

アートやアートプロジェクトに対する固定観念を揺さぶり、現場の仕事や社会との関わりについて考えます。講師とともに学ぶ受講生の多様な価値観や個人史に触れ、多角的に物事を捉えながら、アートプロジェクトを自分ごととして考えていく種を掴みます。



知る

- アートの知識とアートプロジェクトのイメージ
- 社会を捉える視点(地域、コミュニティ、多様性、身体、食、仕事など)
- 情報のインプットとアウトプットの仕方
- 現場の仕事(事務局、アートプロジェクトを支える人々、作品のインストール、他分野との連携など)

考える

- 私は、なぜアートプロジェクトをやろうとしているのか？
- 私は、どのようにアートプロジェクトと関わるのか？
- 社会における私の興味・関心や問題意識はどこにあるのか？

学びのサイクル〈思考編〉

365日の学び

アートプロジェクトについて考えるためには、まずはそこに関わる人や仕事を知り、想像力を広げることが必要です。思考編では、学校での1日を軸に、予習・復習などの課題を通して日々のなかで学ぶ習慣を養います。こうした年間を通じた「学びのサイクル」は、技術編・対話編でも基本となる枠組みです。



授業毎 | 午前の部400字以内 / 午後の部800字以内の授業レポート

期末毎 | 前期課題は、運営視点の現場レポート(5,000字程度)

後期課題は、グループワークによる企画書作成 & プレゼンテーション

スクールマネージャーのサポート

- 予習のための情報提供
- 授業のポイントを伝える
- 授業後は、受講生と内容をふりかえり、問いや疑問に応答
- 授業で語られた重要な言葉をワードリストにまとめて共有
- 課題レポートへコメントをすることで復習をサポート
- アートプロジェクトの現場の紹介
- キャリアプランについての相談対応



2015.6.28

ガイダンス

- 開講に向けて
- 受講生、スクールマネージャー自己紹介
- プログラムについて

トークセッション

GUEST

藤浩志 Hiroshi Fuji

[美術家/十和田市現代美術館館長/
秋田公立美術大学教授]



京都市立芸術大学大学院修了後、バブアニューギニア国立芸術学校、都市計画事務所勤務などを経て1992年藤浩志企画制作室を設立。家庭廃材を利用した『Vinyl Plastics Connection』『Kaekko』『Kaeru System』など、地域資源・適正技術・協力関係を活かした美術表現を試みる。2014年より十和田市現代美術館 館長、秋田公立美術大学 美術学部美術学科教授。

小山田徹 Toru Koyamada

[アーティスト]



京都市立芸術大学日本画科卒業。1998年までパフォーマンスグループ『ダムタイプ』で舞台美術と舞台監督を担当。平行して『風景収集狂舎』の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行ない現在に至る。近年、洞窟探検グループ『Com-pass Caving Unit』メンバーとして活動中。京都市立芸術大学教授。

中崎透 Toru Nakazaki

[美術家]



武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。言葉やイメージといった共通認識の中に生じるズレをテーマに自然体でゆるやかな手法を使って、看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなどを制作。2006年よりユニット『Nadegata Instant Party』としても活動している。

HOST

森司 Tsukasa Mori

[「思考と技術と対話の学校」校長/
東京アートポイント計画ディレクター]



東京アートポイント計画の立ち上げから関わり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。2011年7月より『Art Support Tohoku-Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)』のディレクターも務める。公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京事業推進室 事業調整課長。

7.11

アートプロジェクト概論 1

アートプロジェクトとは何か

アートプロジェクト概論 2

アートマネージャーの立ち位置

LECTURER

佐藤李青 Risei Sato

[スクールマネージャー]



アートプロジェクト概論 3

情報収集集力を身につける

アートプロジェクト概論 4

プロジェクトのはじまりから終わりまで

LECTURER

橋本誠 Makoto Hashimoto

[スクールマネージャー]



及位友美 Yumi Nozoki

[スクールマネージャー]



7.25



地域での創造活動に必要な環境を整える

—「継続」から始まること

GUEST

松尾真由子 Mayuko Matsuo

[Breaker Project 事務局長]



2008年文化芸術活動のつなぎ手になりたいという思いから、参加者やサポートスタッフとして関わっていたBreaker Projectに事務局として勤務。『水都大阪2009』にて藤浩志『かえるシステム』サブディレクター兼任。11年より事務局長を務める。地域の課題に向き合いながらもアートを課題解決の手段としないプロジェクトの運営を行っている。

HOST

佐藤李青 Risei Sato



『墨東まち見世』とその後

GUEST

ヨネザワエリカ Erika Yonezawa

[ライター]



広告会社などを経て東京を中心にライターとして活動。墨田区向島、鳩の街通り商店街のチャレンジスポット鈴木荘203号室にオフィスを構え、鳩の街通り商店街、墨東まち見世、39アートin向島、すみだ川ものコト市など地域のものごとに様々な関わり。ファッションと美術とおいしいものをこよなく愛するさすらいライター。

HOST

坂田太郎 Taro Sakata

[スクールマネージャー]



8.8



地域の課題に向き合い、アーティストとともに取り組むまちづくり

GUEST

佐脇三乃里 Minori Sawaki

[認定NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター アシスタントディレクター]



日本大学大学院理工学研究科建築学専攻の在学時より「建築とアート」をテーマに文化施設の活動や運営に関する研究・調査に携わってきた。2011年よりNPO法人黄金町エリアマネジメントセンターに所属し黄金町芸術学校の企画や、アートマネジメントとまちづくりに関わるプログラムのコーディネートを担当している。

HOST

及位友美 Yumi Nozoki



身体表現と当事者研究の出会い —「予期」と「線引き」を巡って

GUEST

手塚夏子 Natsuko Tezuka

[ダンサー/振付家]



自身の体を素材とし実験する作品『私的解剖実験』シリーズを制作。身体の観察から、関わりそのものの観察まで視座を広げ、小さな単位の物事を多角的に照らし出すことを試みている。2010年から、国の枠組みを疑いつつ、日本を始め様々なアジアの民俗芸能を調査している。

熊谷晋一郎 Shinichiro Kumagaya

[東京大学先端科学技術研究センター准教授/
医師]



新生児仮死の後遺症で、脳性まひに。以後車いすでの生活となる。東京大学医学部医学科を卒業、専門は小児科学。自身の「障害」を分析し、研究することで新しい価値や枠組みを探る当事者研究も専門とし、著書『リハビリの夜』で新潮ドキュメント賞受賞。現職は東京大学先端科学技術研究センター准教授/医師。

MODERATOR

大澤寅雄 Torao Osawa

[ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室/
文化生態観察]



慶應義塾大学卒業後、劇場コンサルタントとして公共ホール・劇場の管理運営計画などに携わる。2003年文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。文化を生物のように捉え、生態学的に観察・研究することで、地域や社会と芸術・文化の在り方を探る「文化生態観察」を専門としている。

9.12



劇場を飛び出し 「観客との関係性」を探る プロデュースの仕事

GUEST

宮永琢生 Takuo Miyanaga

[演劇プロデューサー]



2009年に劇作家・演出家の柴幸男とともに劇団『ままごと』を立ち上げ、カンパニーのプロデューサーとして活動。企画制作ユニット『ZuQnZ(ズクンズ)』主宰。近年は、劇場公演のプロデュースとともにパブリックスペースなどで《観客との関係性》に軸を置いた作品創作を積極的に行っている。

HOST

及位友美 Yumi Nozoki



都市の深層への眼差し —「非場所」と「場所」がせめぎあう 現代都市

GUEST

港千尋 Chihiro Minato

[写真家／著述家]



記憶とイメージをテーマに、映像人類学など幅広い活動を行う。都市の群衆に継続的にカメラを向け、これまで南米、欧州、アジア各地で多くの現場に遭遇、写真と論考を発表。多摩美術大学教授。オックスフォード大学客員研究員。第52回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、あいちトリエンナーレ2016芸術監督。

スザンヌ・ムーニー Suzanne Mooney

[アーティスト]



ダブリンで生まれ、アイルランド国立美術大学で学んだ後、スペイン、韓国など世界中のアーティスト・イン・レジデンスに参加し、現在日本在住。都市の風景に潜む、グローバル化、都市化、技術の急速な発展といった様々な問題を、主に写真を通して顕在化させる手法で作品を発表。2015年『Aesthetica』雑誌の年間賞を受賞。多摩美術大学非常勤講師。

MODERATOR

毛利嘉孝 Yoshitaka Mouri

[社会学者／東京藝術大学准教授]



1990年代より英国のカルチュラル・スタディーズを精力的に紹介し、メディア、文化、公共空間と政治の関係を考察する多くの論考と実践は、キュレーター、アーティストに影響を与える。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ MA、PhD(社会学)、九州大学助教授を経て現職。主著に『ストリート思想：転換期としての1990年代』等。

9.26



アイデアや思いを「かたち」に 仕上げるコーディネート

GUEST

長内綾子 Ayako Osanai

[Survivart / キュレーター]



建築を学んだ後、アーティストの岩井優らとSurvivartを立ち上げ、トークや展覧会等を企画。2011年秋、拠点を仙台に移す。建築的な思考と密な対話を通じたコーディネートが、アーティストやディレクターの信頼を得て、フリーランスとして、国内外の国際展、アートプロジェクト、文化施設の現場に関わる。

HOST

坂田太郎 Taro Sakata



「わからない」ことに 耐えられない社会で 「ともにある」ことを考える

GUEST

伊藤亜紗 Asa Ito

[美学者]



東京工業大学准教授。専門は美学、現代アート、身体論。障害者とともに身体や感覚について考える場を作る活動をしている。著作に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社、2015年)など。近年は作品の制作や展覧会の企画等にも携わる。参加作品に小林耕平《タイム・マシン》(国立近代美術館)など。

西尾佳織 Kaori Nishio

[劇作家／演出家／鳥公園主宰]



「正しさ」から外れながらも確かに存在するものたちに、少しボケた角度から、柔らかな光を当てようと試みている。モノの質感をそのままに手渡す言葉と美術、「存在してしまっていること」にどこまでも付き合おうとする演出が特徴。『カンロ』にて、第58回岸田國士戯曲賞最終候補作品にノミネート。

MODERATOR

石幡愛 Ai Ishihata

[としまアートステーション構想事務局長／一般社団法人オノコロ]



場の設計からの逸脱。勘違いしながらもともにいる。そうした子供の「遊び」に特徴的な状況に関心を持ち、「遊びと余白」をテーマに研究を行う。同時にアートプロジェクトや地域教育プロジェクトに関わり、NPO法人クリエイティブサポートレッツ事務局を経て2014年より現職。プロジェクト評価の新たな視点や手法の開発にも取り組んでいる。

10.17



アーティストやクリエイターの 活動をサポートする 横浜の「創造都市施策」

GUEST

杉崎栄介 Eisuke Sugizaki

[公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、広報ACYグループ担当リーダー、プログラム・オフィサー]



ACY(アーツコミッション・ヨコハマ)事業を立ち上げから現在まで担当。創造都市横浜の相談窓口としてアーティストやクリエイターの相談を1,000件以上受けてきた。ACY助成制度の設計・運用、創造都市横浜プロモーション、芸術不動産、地元企業とデザイナーによる商品開発など、芸術文化とまちづくりや産業が交わる現場を担当。

HOST

佐藤李青 Risei Sato



遊歩型パフォーマンス 『演劇クエスト』の過程と 観客の体験に迫る

GUEST

落雅季子 Makiko Ochi

[劇評家／BricolaQ]



演劇・ダンス評の執筆に携わる。BricolaQでは毎月のおすすめ演劇コーナー(マンスリー・プリコメンド)やインタビューのシリーズなどを担当。ドラマトゥルクとして、主宰の藤原ちからとともに遊歩型ツアープロジェクト『演劇クエスト』を各地で創作。インタビュー、座談会、批評文、小説まで幅広い文体で活動中。

HOST

及位友美 Yumi Nozoki

11.7



リスクを内包するマネジメントと、 評価のエビデンスと課題

GUEST

小林瑠音 Rune Kobayashi

[應典院アートディレクター／文化政策研究者]



大阪大学大学院在学中より文化政策を専門とし、ウォーリック大学大学院ヨーロッパ文化政策・経営専攻修士課程修了。應典院では現代美術展や、子供とアートをつなぐプログラムの企画・運営等を行う。アートとコミュニティが遭遇していく過程と、その社会的インパクトに関心を持ち、コミュニティ・アート史を研究している。

HOST

佐藤李青 Risei Sato



民俗学とアートプロジェクトの 手法からひもとく、 現在の社会や文化

GUEST

EAT&ART TARO

[アーティスト]



調理師学校卒業後、飲食店勤務を経てギャラリーや美術館などでケーキリングや食のワークショップなどを行っている。これまでに瀬戸内海の島々でつくった『島スープ』、昭和の料理本を調査収集しレシピを再現する『レトロクッキング』『おにぎりのための、毎週運動会』など食をテーマとした作品を多数発表している。

山田慎也 Shinya Yamada

[国立歴史民俗博物館民俗学系准教授]

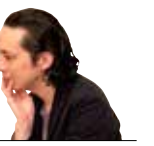


国立民族学博物館COE研究員、国立歴史民俗博物館助手を経て、2007年より現職。専門は民俗学、文化人類学、とくに儀礼の近代化を扱う。著作に『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』(東京大学出版会、07年)など。歴博の常設展示では通過儀礼やおせち料理、企画展示で他界と死者表象や慶弔用花環の展示を担当。

MODERATOR

長島確 Kaku Nagashima

[ドラマトゥルク／翻訳家]



日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、様々な演出家・振付家の作品に参加。近年は演劇の発想やノウハウを劇場外へ持ち出すことに興味をもち、アートプロジェクトにも積極的に関わる。『墨田区／豊島区／三宅島在住アトレウス家』『長島確のつくりにかた研究所:だれかのみたゆめ』ほかジャンルをまたぐ活動多数。

11.28

アートと教育を多彩に結ぶ 領域横断型プラットフォームの 現在

GUEST

田中真実 Mami Tanaka

[NPO法人STスポット横浜地域連携事業部
ディレクター/横浜市芸術文化教育プラット
フォーム事務局長]



大学で地理学と都市計画を学ぶなかで、まちに芸術文化でアプローチする手法に関心を持つ。2008年よりNPO法人STスポット横浜でアートと学校をつなぐコーディネーターとして活動。子供たちとアーティスト、両者にとっての創造的な出会いを求めて実験的な試みを展開。近年は「障害とアート」について考えを深める場づくりも行う。

HOST

坂田太郎 Taro Sakata

地域とコミュニティの活動を 生み出す「場」との関わり

GUEST

家成俊勝 Toshikatsu Ienari

[建築家/京都造形芸術大学空間演出
デザイン学科特任准教授]



2004年、赤代武志とともにdot architectを設立し、大阪・北加賀屋を拠点に活動している。建築設計だけに留まらず、現場施工、アートプロジェクト、様々な企画にも関わる。

鈴木一郎太 Ichirota Suzuki

[樹大と小とレフ取締役]



1997年に渡英、アーティストとして活動を行う。帰国後、浜松市に拠点を置くNPO法人クリエイティブサポートレッツにて、社会の多分野と連動した様々な文化事業(場づくり・展覧会・トーク・人材育成事業・まち歩き等)の企画を担当。2013年、建築設計から企画・マネジメントまで行う(樹大と小とレフを建築家の大東翼とともに設立。

MODERATOR

佐藤慎也 Shinya Satoh

[日本大学准教授/建築家]



「建築とアート」をテーマとして、芸術文化施設の建築計画に関する研究や、これまでの芸術文化施設とアートの関係を超えた、新しい「建築とアート」についての考察に取り組む。実践的な活動においても幅広く展開しており、「としまアートステーション構想」など、数々のアートプロジェクトに携わっている。

12.19

地方都市におけるアートセンター や芸術祭のあり方を考える

GUEST

新居音絵 Otoe Nii

[エヌ・アンド・エー株式会社[ナンジョウアンド
アソシエイツ] 執行役員]



早稲田大学美術史学専修卒業。エヌ・アンド・エーの社員として、マネジメント、コーディネーション、PRなど多岐に渡る事業を担当。2008年に開館した十和田市現代美術館の計画立案から携わり、地域に開かれたアートセンターの役割を意識しながらマネジメントを行うなど、社会とアートをつなぐ活動を行っている。

HOST

古屋梨奈 Rina Furuya

[スクールマネージャー]



生きることと仕事や表現の つながりをつくる

GUEST

伊藤洋志 Hiroshi Ito

[起業家/ナリワイ代表]



京都大学農学研究科修士課程修了。生活のなかから生み出す頭と体が鍛えられる仕事をテーマに、個人のためのナリワイの開発と実践を行う。ギャラリースペース・シェアオフィスの運営や、企画業、収穫・販売を行う農業家や『全国床張り協会』といったギルド的団体運営も行う。著書に『ナリワイをつくる』(東京書籍)など。

現代芸術活動チーム「目」

[南川憲二/ディレクター
荒神明香/アーティスト]



個々のクリエイティビティを特性化し、連携を重視するチーム型芸術活動を行っている。中心メンバーは、荒神明香、南川憲二、増井宏文。果てしなく不確かな現実世界が実感に引き寄せられる「体験」を作品として展開している。宇都宮美術館館外プロジェクト、大分トリエンナーレ2015、大地の芸術祭2015など、各地で作品を発表。

MODERATOR

吉澤弥生 Yayoi Yoshizawa

[共立女子大学文芸学部准教授]



大阪大学大学院修了、博士(人間科学)。芸術社会学を専門として、労働、政策、運動、地域の視座から現代芸術を研究。大阪市の現代芸術事業やTokyo Art Research Lab事業などを通して芸術文化事業の記録・調査・検証に取り組む。NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト[recip]理事。NPO法人アートNPOリンク理事。

2016.1.16

後期課題

●発表

COMMENTATOR

帆足亜紀 Aki Hoashi

[アート・コーディネーター/横浜トリエンナーレ
組織委員会事務局プロジェクト・マネージャー]



シティ大学(英国)にて博物館・美術館運営修士号取得後、フリーで様々な芸術文化事業に携わる。2010年より横浜トリエンナーレ組織委員会事務局補佐、同事務局長を歴任し、15年より現職。組織化されていない現場を組織化させることや業務をフロー化させるなど、アートプロジェクトの現場の職場環境の改善などにも力を入れる。

林曉甫 Akio Hayashi

[プロデューサー/ NPO法人インビジブル
マネージング・ディレクター]



大学卒業後、NPO法人BEPPEU PROJECTで公共空間等を利用したアートプロジェクトを企画運営し、文化芸術による地域活性化や観光振興に携わる。別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界2012』事務局長、鳥取藝住祭総合ディレクター(2014年、15年)六本木アートナイトプログラムディレクター(14年、15年)。15年にNPO法人inVisibleを設立。

森司 Tsukasa Mori

修了式



後期課題〈思考編〉

授業と毎回の課題に追われながらも、「アートプロジェクトとは何か?」を自分なりに考えてきた受講生たち。

後期課題は、グループワークで取り組みました。

最終日には、ゲストコメンテーターを迎えて講評会を開催し、1年間を締め括りました。

Q.

後期課題

「いま、社会に必要なアートプロジェクトを考案しなさい」

・4～8名のグループで、課題に取り組む。

🔗 課題 | 1 以下の内容を含めた企画書をグループごとに作成する。

エントリーシートを作成する

- 本企画に至った経緯(300字以内)
- 役職の作業内容(各300字以内)

授業で学んだことを踏まえて役割分担を行い、企画を運営するにあたって自身の特性をどのように生かしていくかを、それぞれができるだけ具体的に記載する。

事業計画書(企画書・体制表・スケジュール・予算書)を作成する

事業計画書を作成するにあたって

- 「思考編」で語られているアートプロジェクトとは何かについて、授業内容や実際に自分で体験した現場をふりかえりながら考える。
- いま、社会に必要なアートプロジェクト/アートに関わる取り組みとは何かについてグループ内でディスカッションをする。
- その上で自分たちだったら、どのような現場で、どのようなことを、どのような立場でやるのか想像しながら、事業計画書にまとめる。
- 指定の用紙を使用して提出すること。字数制限は厳守。

🔗 課題 | 2 事業計画書の内容についてプレゼンテーションをする。
(各グループ持ち時間10分間程度+質疑応答)

A.

エントリーした企画一覧

Group 01

五感で体感する図書館

電子書籍の普及や活字離れが進む現代社会に向き合い、メディアとしての「本」に出会い直すきっかけとしてのアートプロジェクト。

秋の夜長を利用して、日本近代文学館を会場に架空の「夜の図書館」をつくり出す。施設内のカフェも活用し、本を読むだけでなく、能動的に体験する場づくりを行う。



Group 02

プロジェクト イリグチ

「普段、アートプロジェクトに来ない人に来てもらいたい」と考え、新たなアートの「入口」づくりを試みる。実施場所を、授業と前期課題で出会った横浜・黄金町に設定。住民や観光客などが気軽に訪れつながる場にしようと、誰もが親しみやすい「駄菓子屋」に着目。設計・施工・運営を建築家の家成俊勝さんに依頼し、敷居の低さを生かした、人と人、人とアートの創造的な出会いが生まれる「駄菓子屋」になることを期待する。



Group 03

あしたのどうぶつえん

～生きとし生けるものへ、アートと共に想いを馳せる3週間～

上野動物園を舞台に、生物多様性の重要性や、種の保存と環境問題のつながりを自分ごととして捉える機会として、アートプロジェクトを企画。動物園で親しんだゾウやキリンさえも数十年後には見ることができなくなってしまう現状を啓蒙するのがねらい。アートを糸口に、子供も大人も楽しみながら、未来へ続く命の連鎖を絶やさないためのきっかけづくりを行う。



Group 04

アーツ千代田 8 8 8 8

日常のなかにあり、誰にも開かれていて、複数の人によって行われるアートプロジェクト。本企画では、求心力ある数々のプロジェクトを生み出してきた現代美術家・小山田徹さんの「たき火」にフォーカスしたアートプロジェクトを考案した。火を囲み語り合う時のコミュニケーションの豊かさを、日常の生活のなかでいかに生み出していくか。実施会場は学びの舎でもあるアーツ千代田3331の屋上とし、地域の考察も目指す。



2

技術編

現場の仕事を実際の企画・運営プロセスにそって具体的に学び、自分で問いを立てる力を養います。
多様なバックグラウンドを持つ仲間とグループワークを行うことで、役割分担や調整など自分とは異なる他者と協働しながら、アートプロジェクトをかたちにする力を身につけます。

知る

- 現場の仕事(事業設計、資金調達、広報・PR、記録・アーカイブ、報告・検証・評価など)
- 現場の実務(書類の読み方、事業計画書[企画書・予算書・体制表・スケジュール]のつくり方、共通言語の獲得の仕方、リサーチ手法、会議の仕方、調整の仕方、協働作業の進め方、プレゼンテーションのやり方など)

考える

- 私は、チームでどのような役割を担うのか？
- 私たちは、誰に向けてアートプロジェクトを行うのか？
- 私たちは、誰とどのようにアートプロジェクトを行うのか？

かたちにする

- 運営体制(組織の位置づけ確認、役割分担、進行管理、調整、交渉など)
- 企画(事業計画書作成)

学びのサイクル〈技術編〉

アクションのすべてが演習

アートプロジェクトをかたちにするには、事業計画書一式(企画書・体制表・スケジュール・予算書)が必須。
技術編では、グループワークを通して、事業計画書をつくる力を重点的に養います。
企画は、ぎりぎりまで更新できるもの。授業と自主的な放課後活動によって、繰り返し練ることで、質の高いアートプロジェクトをつくるプロセスを経験します。

1 | 初回授業

講義 | 講師の話聞き、**ケーススタディ**に取り組む [P.21](#)▶
ブリーフィング | 書類の読み方と「事業計画書」のつくり方を学び、**演習問題**を理解する [P.20](#)▶
グループワーク | 「体制表」を作成する、「スケジュール」を決める
進捗報告 | 次回授業までに、何をどうやるか共有する



2 | 放課後

リサーチ | インターネットや書物を通してのリサーチ
フィールドワーク | 参考となる現場にグループで足を運び、視点と経験を増やす
ディスカッション | リサーチやフィールドワークを踏まえて、議論を重ねる



3 | 授業2回目

進捗報告 | 放課後活動にて、何がどこまで進んだかを共有する
ミニレクチャー | スクールマネージャーより、参考となる事例を学ぶ [P.22](#)▶
グループワーク | 「企画書」と「予算書」を作成し、「事業計画書」を一度完成させる [P.23](#)▶
中間発表 | 事業計画を発表、クラス全体からフィードバックをもらう
ふりかえり | 事業計画の更新、スクールマネージャーから細かくフィードバックをもらう
進捗報告 | 最終発表までに、何をどうやるか共有する



4 | 放課後

リサーチ/フィールドワーク/ディスカッション | ブラッシュアップを行う
書類提出 | 発表2日前までに「事業計画書」を提出する



5 | 授業3回目

最終発表 | プレゼンテーション(10分)+講評(15分)
クラス全体からフィードバックをもらう
ふりかえり | スクールマネージャーから細かくフィードバックをもらい、反省会を行う

※授業の回数、進め方はテーマにより異なります。

授業毎 | 「仕事を知る」の授業レポート(400字以内)

期末毎 | 前期課題は、課題図書読書感想文(2,000字程度) / 後期課題は、企画書制作 & プレゼンテーション

2015.6.28

ガイダンス

- 開講に向けて
- 受講生、スクールマネージャー自己紹介
- 基礎プログラムについて

トークセッション

GUEST

藤浩志 Hiroshi Fuji

[美術家/十和田市現代美術館館長/秋田公立美術大学教授]

小山田徹 Toru Koyamada

[アーティスト]

中崎透 Toru Nakazaki

[美術家]

HOST

森司 Tsukasa Mori

[「思考と技術と対話の学校」校長/東京アートポイント計画ディレクター]

7.12

アートプロジェクト概論 1

アートプロジェクトとは何か

アートプロジェクト概論 2

アートマネージャーの立ち位置

LECTURER

佐藤李青 Risei Sato

[スクールマネージャー]

アートプロジェクト概論 3

情報収集集力を身につける

アートプロジェクト概論 4

プロジェクトのはじまりから終わりまで

LECTURER

橋本誠 Makoto Hashimoto

[スクールマネージャー]

嘉原妙 Tae Yoshihara

[スクールマネージャー]



7.26



現場を検証する力を身につけ、向き合うべき評価について考える

GUEST

吉澤弥生 Yayoi Yoshizawa

[共立女子大学芸学部准教授]

HOST

橋本誠 Makoto Hashimoto



演習 1

トークイベントをつくる

8.9



活動を続けるための仲間と資金と拠点の理想と現実

ココルームの新拠点の活用方法と経営戦略

GUEST

上田假奈代

Kanayo Ueda

[詩人/詩業家/NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)代表]



日雇い労働者のまち・釜ヶ崎にて、喫茶店のふりをしながら「表現と自律と仕事と社会」をテーマに活動。釜ヶ崎芸術大学では、美術家や天文学者などを講師に招いて、地域のおじさんたちを中心に緩やかな学びあいの場を無料(カンパ歓迎)でつづけている。平成26年度文化庁芸術選奨文部科学大臣(芸術振興)新人賞受賞。

HOST

嘉原妙 Tae Yoshihara



演習 1

トークイベントをつくる

9.13



芸術と社会の生きた関係を探求するための、アートプロジェクト

GUEST

雨森信

Nobu Amenomori

[大阪市立大学文学部特任講師/Breaker Projectディレクター]



2003年より大阪市文化事業として『Breaker Project』を企画。既存の美術空間やシステムにはおさまらない独自の表現活動を開拓するアーティストとともに、地域に根ざしたプロジェクトに取り組み、現代における「芸術の役割」「芸術と社会の生きた関係」を探求する。関わる人すべてにとって新たな気づきをもたらす実践を目指して活動。

HOST

橋本誠 Makoto Hashimoto



演習 1

トークイベントをつくる

演習 2

まちなか公演/プログラムをつくる

9.27

中間まとめ

- 前期授業の振り返り
- 自主活動の共有



ミニレクチャー 1

トークイベントをつくる

ミニレクチャー 2

企画のつくり方

LECTURER

橋本誠 Makoto Hashimoto

坂本有理 Yuri Sakamoto

[スクールマネージャー]



演習 2

まちなか公演/プログラムをつくる

演習問題

演習では、事業計画書[企画書・予算書・体制表・スケジュール]の作成を通して、企画をかたちにする技術を養います。

演習1「トークイベントをつくる」では3つのトークプログラム事例をもとに企画実施の基本を学ぶ。①「国際シンポジウム」では、企画案に加え、ゲスト招聘や同時通訳などの手配・運営について考え、②「アートプロジェクトのキックオフイベント」では、プロジェクト紹介のトークに加え、ツアーや交流会の企画に取り組んだ。③「フォーラム」では、分科会など終日にわたるプログラムの計画をした。

演習2「まちなか公演/プログラムをつくる」では、様々な制約のあるまちなかで企画実施する際のポイントを学ぶとともに、自分たちらしい企画とは何かを考えた。演習3「拠点をつくる/つかう」では、恒常的な活動を意識した計画などについて議論を深めた。〈坂本〉

演習1
「トークイベントをつくる」

演習2
「まちなか公演/プログラムをつくる」

演習3
「拠点をつくる/つかう」

ケーススタディ

講義の後半では、ゲスト講師が現在向き合っている課題を題材に「自分たちだったらその課題へどのように向き合うか?」という視点でグループディスカッションを行います。

上田假奈代さんのケーススタディでは、上田さんの運営するスペース『ココルーム』が直面している入居物件の移転がテーマ。ゲストハウスやカフェの運営により収益を確保しながら、これまで取り組んできた「表現との出会いの場」としてふさわしい機能をいかに盛り込むかについて議論を行った。受講生からは、シェア店舗、畑、ファブラボ、アーティスト・イン・レジデ

スなどのアイデアや、釜ヶ崎のおじさんが働くことができる場になるといいのではないかと様々な意見が集まった。一方で上田さんは、場の維持・活用に必要なお金を稼ぐだけではなく、収益の一部を身寄りのない子供などに渡す仕組みをつくるなど、お金を稼ぐ(=働く)ことの意義をいかにつくるか、という点をより考えていた。当事者を交えて現在進行形の課題に

取り組むことで、リアルにプロジェクトが動いているということ意識しながら思考する場となった。〈橋本〉



10.18



アーティストや作品の
在り方を伝え、
社会とアートを
つなぐ仕事
事務局の担う役割とは

GUEST

帆足亜紀 Aki Hoashi

[アート・コーディネーター/横浜トリエンナーレ
組織委員会事務局プロジェクト・マネージャー]

HOST

森司 Tsukasa Mori



演習 2

まちなか公演/
プログラムをつくる

11.29



鳥取だからこそできる
劇場・劇団の在り方
演劇的手法と
美術的手法の違い

GUEST

齋藤啓

Kei Saito

[鳥の劇場制作担当]



東京で舞台照明会社に勤務し、鳥の劇場の前身となる劇団の活動にも参加。2006年鳥取県に移り、鳥の劇場の立ち上げに参加。廃校を劇場に変える。劇団制作、各種劇場プログラム、『鳥の演劇祭』の企画・運営、海外とのプロジェクトなどの担当。舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)理事。鳥取県智頭町在住。

HOST

阿比留ひろみ

Hiromi Abiru

[スクールマネージャー]



ミニレクチャー 3

アーティストとの企画づくり

ミニレクチャー 4

拠点の運営

LECTURER

阿比留ひろみ Hiromi Abiru

嘉原妙 Tae Yoshihara

橋本誠 Makoto Hashimoto

演習 3

拠点をつくる/つかう

ミニレクチャー

演習では、受講生が取り組む
課題に対する補足講義として、
スクールマネージャーが
ミニレクチャーを行っています。

ミニレクチャー4では、「アートプロジェクトの拠点」をテーマに、①運営事務局の事務所②空き店舗などの遊休スペースの活用事例③インフォメーションセンター④ボランティアルームといったアートプロジェクトに関する4種類の拠点を例に挙げ、その用途や必要な機能、実際に運営する際の準備方法などを具体的に解説。受講生がよりリアリティを持って課題に取り組めるような情報提供の時間を設けた。(嘉原)

12.20



ソーシャルベンチャー
としてのアートNPO
課題を見据えた
事業設計のポイント

GUEST

山出淳也

Junya Yamaide

[NPO法人 BEPPU
PROJECT代表理事/
アーティスト]

アーティストとして各地で活動、文化庁在外研修員としてパリに滞在の後、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」(09、12、15年)を実現。独自性のある芸術祭として、美術業界からだけではなく、まちづくりや地方創世の文脈からも評価を受ける。平成20年度 芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

HOST

橋本誠 Makoto Hashimoto



演習 3

拠点をつくる/つかう

1.24



演習 3

拠点をつくる/つかう

後期まとめ

- 演習の振り返り
- 個人面談

2.7

後期課題

- 発表

COMMENTATOR

坂田太郎 Taro Sakata

及位友美 Yumi Nozoki

修了式



グループワーク

スクールマネージャーの伴走のもと、グループで演習問題に取り組み、
自分たちで繰り返し問いを立てながら思考を深めます。

受講生は、アートプロジェクトを運営するNPO職員/事務局という組織設定で、5~6名1組となり、3つの演習問題に取り組んだ。グループ内の役割(事務局長、広報、会計、プロジェクト担当など)を設定し、まず行うことは自分たちの立ち位置の確認。私たちは、何を目指し、どんなメンバーで、どこに向けて、どのようなことをしようとしている団体なのかを話し合い、組織設定を、よりリアルにとらえていく。その上で、組織の趣旨に沿って、企画をかたちにする作業に入る。リサーチ、ブレインストーミング、アーティスト選定、会場選定など、実際にまちを歩き、人と話し、情報収集を行い、議論を交わしながら内容を固め、最終的には事業計画書に言葉を綴る。書類に落とし込まれた内容を読み合わせながら、なぜそうするのか、そうしたいのか、現実的なのか、グループ内で何度も話し合い、思考を重ね、企画案をまとめ、アーティストへの参加依頼や、助成金申請をするレベルまでの書類を作成する。演習では、一連の取り組みを通して、企画力に加え、グループ内での進行管理や調整など、現場で求められるチーム力も磨いていく。また、各グループには担当スクールマネージャー1名が付き、課題内容の確認にはじまり、最終発表のつくり込みに至るまで伴走し、強度ある企画を完成させるためのヒントを投げかける。一つひとつ確認し、企画の実現性を高めるサポートをしていく。右記は、受講生とスクールマネージャー(SM)間でなされたメールのやりとりの一例である。

受講生A | 実際に会ったことのあるアーティストが少ないので、自分たちの企画に最適の人物なのか判断がつきません。

SM | 作品やアーティストを自分の目で見て知ることは重要ですが、ただ、私たちが直接会ったことがないアーティストを候補にすることはあります。そのときに注意するのは、彼らの作品がどういった形態のものか、彼らが意識していることは何かなどをリサーチして、自分たちの企画にマッチするかを考えることです。アーティストステイメントや第三者の視点が入ったインタビュー記事、批評記事などを参考に考えます。

受講生B | アーティストによってプロジェクトは変化していくと思うので、どこまで詳細を決めるべきか迷います。

SM | アーティストによってプロジェクトが変化する、という視点は大切ですが、彼らに依頼する際に、事務局が「条件」を設定することは可能です。例えば、地域住民の交流を目的の一つに据えた企画の場合、ワークショップなど、住民と一緒に作品を作り上げていくスタイルで制作してもらいたいという希望を伝えることは問題ありません。ただ、もちろんアーティストによっては、それは無理だと仰る方もいます。詳細は決められませんが、条件を設定することで企画は育ちます。

受講生は、年齢も所属もライフスタイルも様々。そんななか、グループで工夫をしながら時間をつくって、課題に挑み、自分たちらしい、熱量のこもった企画をかたちにする作業に取り組んだ。(坂本)

後期課題〈技術編〉

後期課題は、これまでのグループワークの成果を図るための個人ワークです。
最終日には、思考編と同様に講評会を開催し、1年間を締め括りました。

Q.

後期課題

「『思考と技術と対話の学校』にふさわしい部活動を考案しなさい」

- ・個人ワークとして、課題に取り組む。
- ・「実際にアートプロジェクトをやってみたい」「アートプロジェクトの広報に関する研究活動をしたい」など切り口は自由。

🔗 課題 | 1 以下の内容を含めた事業計画書を個人で作成する。

事業計画書(企画書・体制表・スケジュール・予算書)を作成する

事業計画書を作成するにあたって

- 本企画に至った経緯(300字以内)
- 参加してもらいたい受講生イメージ(200字以内)
- 初年度活動計画
- 活動成果の提示方法(200字以内)
- 要求予算額
- 指定の用紙を使用して提出すること。字数制限は厳守。

🔗 課題 | 2 事業計画書の内容についてプレゼンテーションをする。 (持ち時間10分間程度+質疑応答)

A.

エントリーした企画の一部

01 アートプロジェクト系新聞リサーチ部

インターネット時代において、あえて「新聞」というメディアや文脈を活用するアートプロジェクトが多く存在することに注目し、様々なアートプロジェクト系の新聞をリサーチ・アーカイブする活動。
受講生自身が普段から様々なアートプロジェクトの広報ツールを集めていたり、関わるプロジェクトで編集を担当した経験があったことから、その視座を深めるべく提案された。

02 思考と技術と対話の学校、学生に話を聞きに行く部

受講生を対象に、どのような問題意識を持って参加しているのか、アートプロジェクトに関心を持ったきっかけは何か、普段はどのような活動をしているのかなど、受講生同士の視点からインタビューを行い、3つの基礎プログラムの受講生間のネットワーク形成を目指す。授業を通してアートプロジェクトの現場の様々な人々との出会いがある一方で、ともに学ぶ受講生間の交流が少ないという問題意識から提案された。

03 「思考と技術と対話学校」オリジナルウェブサイトづくり

受講生の視点で注目しているアートプロジェクトやイベント情報を気軽に紹介できるウェブサイトをつくり、運営する企画。
受講生自らの職能を生かした提案であるが、その背景には情報過多な現状のなかで、TARLに集まる人々にとって有益だと思われる情報を公開していくことがねらい。

04 助成金をまな部

助成金申請について学び、実際に申請をしてみる活動。定期的に勉強会を開催し、助成金申請書類や報告書の書き方などについて学ぶ。また、各種助成プログラムの情報収集や、助成を受けている団体の事例リサーチ、報告書のまとめ方についての研究などを行う。講師を招くだけでなく、部員同士で各種書類に対して意見交換をしながら必要な技術に磨きをかけていくことを目指す。技術編の授業で、助成金の意義について学んだことをきっかけに提案された。

05 文献購読部

アートプロジェクトに関わる言葉や思考を深め、その共通言語や共通認識の獲得を推進する活動。「思考と技術と対話の学校」の参考図書から1冊を選び、グループで感想や意見を語り合う読書会スタイルで行う。書籍からアートプロジェクトに関する知識を得るだけでなく、意見交換などの対話によって他者の意見に耳を傾けること、自身の意見を伝えるなど柔軟なコミュニケーション技術を磨くことを目指す。

06 日本芸術広報専門会社 準備部(げいほう部)

アートプロジェクトをはじめとする様々な文化芸術活動や、他分野における広報を研究し、アーティストやクリエイター、デザイナーらとともに手法やツールなどを開発。それらの活動で培ったノウハウをもとに文化芸術分野にとどまらず企業活動などにおいて効果的な広報の実践を目指す。
人、技術、お金が十全でないために、アートプロジェクトの現場の広報PR活動が効果的ではないのではないか、という問題意識を背景に提案された活動。



思考編

スクールマネージャー座談会

2014年度の経験を踏まえて、2期目として取り組んだ思考編。手探りではじめたプログラムがどのように進化したか。1年間のふりかえりと、今後の展望について語りました。

聞き手：川村庸子

——「思考編」は、どのようにつくられたプログラムだったのでしょうか？

佐藤 | 昨年度の経験を踏まえて、プロジェクトがどう動いているかの全体像を伝えてから、各論に入っていくという「流れ」を設計したことが特徴の一つだと思います。前期の最初に「アートプロジェクト概論」を設けて、情報収集などの「学び方」を伝える場も設けました。ただこれは、自分たちが知っていることを体系的に伝えたいというよりは、共通言語を持つことで、「その先の話ができる環境」をつくりたいという思いがありました。

及位 | 「流れ」は意識しましたね。例えば、初回の講師をBreaker Projectの松尾真由子さんをお願いしたのは、事務局という組織の長に立ちながら、ディレクターと一緒にプロジェクトを進めていくという、アートプロジェクトにおける組織のスタンダードなかたちが見て取れると思ったからです。また行政の補助金を使うことで、その方針に翻弄されながらも地域とも密な関係を築いている点など、あらゆる側面からアートプロジェクトを俯瞰できることからトップバッターにさせていただきました。10年以上活動を継続されていることもあり、組織論や拠点形成についても話が広がりましたね。

坂田 | 講師の方に現場の生の声を話してもらう際には、仕事のやり方だけではなく「なぜアートの仕事をしているのか？」という、こころ動かされた経験やモチベーションについても話していただくようにしました。個人史に触れることで、受講生にとって身近な人だと感じられ、自分ごととしてイメージが湧くのではないかと考えたからです。

古屋 | 「自分ごと」という感覚は、私も意識したことです。授業のあとに毎回課題としてレポートを提出してもらっていました。最初は感想文に留まっていたので「自分にとって何が気づきだったのか？」とフィードバックをしたんです。すると、自分のなかで忘れていた記憶と結びつけて語ったり、「もう少しここを深めてみたい」という課題意識が次第に生まれていったのが印象的でした。

共通言語を持つことで、
「その先の話ができる環境」をつくりたいという
思いがありました。〈佐藤〉

——この1年間でふりかえって、いかがでしたか？

及位 | 受講生のアートプロジェクトのイメージは、『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ』など予算規模の大きい芸術祭がほとんど。そこで、どんなアートプロジェクトに出会ってみたいのかを森校長とともに考え、日々の生活の延長からアートプロジェクトを立ち上げているゲストをガイダンスに招きました。現代美術家の藤浩志さん、小山田徹さん、中崎さんの話を聞くなかで「これもアートプロジェクトなんだ！」と、受講生たちの固定観念を壊すには十分な驚きがあったようです。

古屋 | そのあとに路上生活者の多い大阪西成区(Breaker Project)と元違法風俗店街の黄金町など、特殊なエリアのプロジェクトが続いたことで、受講生に火がついた感じがありましたよね。「アートが半ば行政に利用される手段になってしまっているのではないか？」「実際にやっている人たちは、どう思っているのか？」など、意欲的な質問が出ていました。

及位 | その疑問をずっと持ち続けて、後期課題にまでつなげていたグループもありましたね。1年間の授業を通して、自分たちなりの視点を深められたように感じます。

古屋 | 思考を深めることを目的とした授業の初回には、脳性まひの障害をお持ちになっている医師の熊谷晋一郎さんに講師をしていただきました。ダンサーの手塚夏子さんも加わって、新たな身体論を展開してもらうことで「この学校で学ぶのは、所謂アートプロジェクトの話ではないな」ということに気づいてもらえたのではないかと思います。

坂田 | そうですね。アートプロジェクトは、多様で多面的です。導入部は象徴的でした。開講説明会では『六本木アートナイト』、ガイダンスではお粥やたき火。そして授業では大阪西成区、横浜黄金町の事例。さらに障害の当事者研究を巡る哲学的な議論が続いていく…。これだけ振り回されれば、予めあったアートプロジェクトの輪郭はあっという間に溶けていく。

佐藤 | 「地域のためのアート」という整理はわかりやすいのですが、一方で「地域をよくするためにやっているわけではない」という話が現場ではよく出ます。すると受講者は、目の前のアートプロジェクトを

どう理解したらいいかわからなくなっていく。そうした複雑で多様な事例に触れることで、個々人の興味が掻き立てられたのかもかもしれません。

及位 | 受講生の自主的な活動も印象的でした。「アートプロジェクトの現場を訪ねる」という前期課題では、出展作家、訪問するアートプロジェクトの評価や歴史、地域や行政との関係性を調べるチームにわかれて、事前リサーチを行っていました。さらに秋には、思考編の受講生から技術編の受講生と交流したいという声が出て、「放課後プログラム」が立ち上がりましたよね。2年目を迎えるにあたって、「先輩は何を考えているのか？」「どんなアートプロジェクトに関わりを持ってきたのか？」など、ざっくばらんに話し合う交流の時間にもなりました。

古屋 | 後期は、前期からの変化を感じることがありました。授業の前に毎回「小テスト」を行っていたのですが、最初は15点満点中数点しか取れなかった人が、2桁の点数を取れるように。「どうしたの？」と聞いてみたところ、「山をかけられるようになってきた」と(笑)。つまり、ただ単語を覚えるのではなく、それがなぜ大事で、どのようにほかとつながっていくのか「ストーリーを描いて理解する」ということができるようになってきたのだと感じました。

坂田 | まずアーティスト名とプロジェクト名、場所など「名前を知っている」ということは大事なんですよね。前提の知識や共通言語を持つことで、その先の話へ進むことができます。

佐藤 | もしかしたら、講師は、近い将来一緒に動くパートナーになるかもしれませんね。

——「思考編」や「技術編」に対する今後の展望を教えてください。

坂田 | うちのグループは、社会人経験がある他業

これだけ振り回されれば、
予めあったアートプロジェクトの輪郭は
あっという間に溶けていく。〈坂田〉

界の人が多かったので、「もっとこうしたほうがいいのではないか？」と批評的なまなざしを持って、授業に取り組んでいました。そんなふうに「外」からの目線で既存のアートプロジェクトを見ていた彼らが、実際に「当事者」として企画をつくるには「決断する」という難しさがあったようです。そのためには、自分たちの問題意識から何かを選んで、それを信じて軸にして、ほかのものを結びつけていく。そのプロセスが、より技術編で深く体験できるといいなと思っています。

古屋 | 放課後プログラム*のなかで、行政職員の受講生による行政の仕事紹介があったのですが、予算を決めるサイクルなど授業に組み込みたい内容が詰まったものでした。現在は、講師やスクールマネージャーが持っているものを持ち寄っていますが、受講生が持っているものもうまく交換し合えたらなと思っています。

及位 | そうですね。受講生とスクールマネージャー、受講生同士のコミュニケーションを、プログラム内にもっと入れていきたいと思っています。

佐藤 | 引き続き「学校」という設定を使いこなしていきたいですね。「学校」というのは、その言葉を聞いただけで、誰もが枠組みややることをイメージできる力がある。学びではなく、「学び合い」を促進する仕掛けだと捉えているんです。それを活用することで、受講生がいまの現場に新たな発想や実践をもたらしていく環境をつくりたいと思っています。

※正規のプログラム外での交流を目的に平日の夜に開催された有志企画。受講生がスピーカーとして話題提供を行った。



古屋梨奈

[アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー]
早稲田大学大学院美術史学専攻修了。2012年より、横須賀美術館学芸員。日常の延長線にあるアートを意識し、『たいけん、ぼうけん、びじゅつかん!』展、『おいしいアート 食と美術の出会い』展を担当。企画展のかたわら、地域の美術館と学校をつなぐ教育普及プログラムをコーディネートする。15年4月より現職。



坂田太郎

[サイト・イン・レジデンス]
これまでP3 art and environment、アサヒ・アートスクエア(AAS)、NPO法人アートNPOリンク等に勤務。現在はP3でリサーチャー、AASでサポートスタッフをしながら、自宅のある横浜でサイト・イン・レジデンスを継続中。主な役割はサイト(土地)にまつわる資料収集と整理、全体の進行管理。



技術編

スクールマネージャー座談会

一人1グループを受け持つ担任制により、受講生とスクールマネージャーがより深く関わり合う技術編。彼らに、1年間のふりかえりと、今後の展望を語ってもらいました。

聞き手：川村庸子

——「技術編」は、どのようにつくられたプログラムだったのでしょうか？

橋本 | 本来、技術というものは現場で揉まれながら身につけていくものです。それを座学で獲得していく場合に必要なのは、いかに「リアリティ」を持ってじっくり取り組めるかだと考えました。また、「仲間との学び合い」のなかから得るものがあるように、演習を中心に設計しました。

坂本 | 演習は、大きく3つ設定しました。「トークイベントをつくる」では書類づくりのプロセスを経験します。「まちなか公演をつくる」は、フィールドワークをすることによって、授業外のコミュニケーションを通して、企画を構築。「拠点をつくる」は、必ず発生する場所との関わりを考え、実際に必要な手続きをシミュレート。実践のレベルが少しずつステップアップしていく流れをつくりました。

嘉原 | 演習の途中では、経過を見て少し思考が縮こまっているなど感じたなら、ミニレクチャーを挟むようにしました。例えば拠点をつくる回は、アートプロジェクトや芸術祭のインフォメーションセンターがどんな役割を担っているのか、そしてそれを達成するために、どこにどんな風に設置しているのかという事例を紹介しました。

坂本 | 演習問題では、いかにリアリティを出すかに苦心しましたね。「これってあの団体のことかな？」と想像したらわかる固有名詞をあえて使ったり、実際のエリアを設定して、まち歩きをしてもらった上で細部を詰めてもらうなど、考えるべきポイントを考えられるようにしたいと思っていました。

橋本 | それは質疑の際にも言えることですね。森校長も「そのアーティストは、いまどこに住んでいるか知ってる？」「その研究者を呼ぶには、その飛行機のシートでは失礼にあたるのではないか」など、かなり具体的な指摘をしていました。これらは

一見ささいなことのように見えますが、現場ではごく当たり前に出てくる話で、日々はその積み重ねです。そうした現場ならではの思考と判断を生むというのは、終始大事にしていたことです。

——この1年間でふりかえって、いかがでしたか？

阿比留 | 様々な場面に立ち会っていて感じたのは、思考編からの積み重ねです。1年目に様々な講師の話や意見を浴びることに聞いたことで、それぞれの在りようや意見が自分にとってどうゆうことなのか、改めて「自分に引き寄せて考える」という、まさに思考力を感じる瞬間が度々ありました。その時はわからなくてもひたすら聞くという体験は、非常に重要だったのだと思います。

嘉原 | そうですね。課題を受けて、さらに「自分たちはどんな団体なのか？」「何のためにやるのか？」など、自分たちで問いを設定する力が大事だと思います。その思考力があってこそ、「どうやるか」という技術力が必要となってきます。

坂本 | ディスカッションでは、「学び合い」のなかでしか得られない学びが発生していました。自分と異なる他者と真剣にやりとりをすることで、「自分の関わり方の入り口が見えてくる」という経験があったのだと思います。

阿比留 | 一人ひとりのモチベーションやバックグラウンドが異なるので、擦り合わせがうまくいったり、決裂してしまったり、その両方がありました。そうしたやり取りを通して、どうして自分が大事にしていることが伝わらないんだろうと悩みますし、「ああ、こんなにがんばっていても伝わらないこともあるんだ」ということにも気づくわけです。そこで、自分が普段どんなコミュニティにいるのか、そうではない場所ではどうやって伝わるのかと試行錯誤が行われていました。

嘉原 | はじめはみんな探り探りでしたが、夏頃からグループ内の役割分担をしたり、自分たちの進め方がつくられていった感じがあります。「自分は事務局長が向いている」「会計をやったことがないからやってみよう」といった具合に、それぞれの得手不得手や興味関心で自然と決まっていた。そこからの話し合いは、具体性が増しましたね。

橋本 | スクールマネージャーは、年間を通じて一つ

のグループを受け持つ担任制です。定点観測ができるからこそ、グループの変化や個々人の状況に気づきやすいという利点があると思います。

——スクールマネージャーとはどういう存在なのですか？大事にしていたことがあれば、教えてください。

阿比留 | 私は「こいう存在の仕方もあるんだ！」というアートマネージャーのサンプルの一つだと思っています。なので、ディスカッションでも飲み会でも、自分の考え方ややり方を率直に話すよう努めました。なぜこの社会にアートが必要だと思うのか、自分がどんなことがあっても折れずに立ち戻る背骨となる考え方に関しては、繰り返し話すようにしました。

橋本 | そうですね。「先輩」が一番近いと思います。自分なりの意見しか言えないのですが、それは経験に基づいているから説得力がある。関わりが深い分、いい意味で影響を与えたり、逆に与えすぎたりしないようにするという距離感には気をつけました。ブレーキをかけることもあれば、背中を押す役割でもあります。

嘉原 | グループで話していると、言葉として出ていなくても言わんとしていることが読み取れることがあります。そこではあえて、それはなぜかを言語化してもらおうような投げかけをしました。なんとなくわかっている状態では進めないというのは、企画や進行の強度につながるので、意識していました。

阿比留 | 私ははじめはあたたかく見守っていたのですが、途中からは小姑のようにどんどん突っ込むようにしました(笑)。どこまで何を言うか、迷いながらだったのですが、その都度状況を見て、判断して関わっていくことの繰り返しだったと思います。私たちにとっても、いい学びの場でした。



ブレーキをかけることもあれば、背中を押す役割でもあります。〈橋本〉

——「技術編」や「対話編」に対する今後の展望を教えてください。

橋本 | 現場を持っている人は、忙しすぎて出席しにくい人もいたという反省があります。ただ、両立できた人は、学校と現場とのいい循環が生まれていた。現場を持っている人がもう少し参加しやすいように、開催日の変更や集中講座なども検討したいと思っています。

坂本 | 学校としての強みは、「受講生・スクールマネージャー・講師」という三者の出会いでもありません。それを次に活かしていける仕組みも、考えていきたいのではないかと考えています。

嘉原 | 私は、自分はスクールマネージャーであると同時に、一受講生としての気持ちもありました。グループで話していても「あ、そんな見え方、聞き方をしていたんだ！」という発見は少なくなかったです。なので、実務的なことだけでなく、そうした感じ方や感想なども、しっかりキャッチアップできる環境をつくっていきたいと思います。これは、「対話編」ではより大事になってくることですね。

橋本 | 自分がやりたい、あるいはできることをするのは、これまでのアートプロジェクトの域を出ないと思うんです。チームでやるというのはどうしても面倒さがあるのですが、それが達成できた時の熱量には、想像を超えるものがある。だからこそ、コラボレーションのなかで生まれるものの可能性に目を向けたいし、そのために必要な仕組みづくりをしていきたいと思っています。



嘉原 妙

[アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー]
京都造形芸術大学卒業、大阪市立大学大学院創造都市研究科(都市政策学)修士課程修了。2010年秋よりNPO法人BEPPU PROJECTにて、国東半島アートプロジェクト(12,13年)、国東半島芸術祭(14年)など地域をフィールドに様々なアートプロジェクトの運営を経験。15年4月より現職。



阿比留ひろみ

[一般社団法人ノマドプロダクション]
大学卒業後、広告代理店勤務を経て静岡県袋井市月見の里学遊館企画スタッフを務め、ワークショップや講座などを担当。その後、大学勤務の傍らNPOにて子供向けワークショップ等を企画制作する。

それぞれの在りようや意見が自分にとってどうゆうことなのか、改めて「自分に引き寄せて考える」という、まさに思考力を感じる瞬間が度々ありました。〈阿比留〉

受講生インタビュー

「思考と対話と技術の学校」には、学生や会社員、すでにアートプロジェクトに参加している方など、さまざまな立場の方が受講していました。「学校」を通しての気づきや想いなど、受講生たちの声を紹介します。

思考編

これからは、“自分の思い”を入れたプロジェクトをやりたいです

私は、『取手アートプロジェクト』で働いています。どこもそうだと思いますが、少ない人数で多くのことをやる必要があるので、どうしても「一人事務局」のようなかたちになってしまっていて情報共有や話し合いの時間が持てず、少し立ち止まって考える時間が欲しくて参加しました。様々な方の講義を聞いて、やはり自分の興味は、アートではなくて「アートとの出会い方」にあるのだと気づいたことは大きな収穫です。特に、キュレーターの長内綾子さんが「アートプロジェクトはたく

さんの人が関わるけれど、最後は作品と一対一で向き合うもの」というようなことを仰っておられて、大きな自信になりました。こうした大切にしたい考え方をいくつか発見できました。これまでは実施することに精一杯で、何をどうやっていいのかわからなかったんだと思います。先のことを考えるといつも悩ましいですが(笑)、これからは、“自分の思い”を入れたプロジェクトをやりたいです。

01

雨貝未来さん
取手アートプロジェクト
運営スタッフ



アートプロジェクトは、“ある”ことが前提ではじまっていないことに驚きました

私は、大学院でアンリ・マティスの研究をしています。将来学芸員になりたいと思っているのですが、近年の美術館の動向として、展覧会だけではなく、教育普及や地域との連携も重視する傾向にあります。そこで、アートプロジェクトを動かす力について学ぶことで、そうした部分の助けになるのではないかと思います。受講者は、普段ほかの仕事しながら二足のわらじやボランティアとして関わっている人も多く、「アートプロジェクトの担い手はこんなにいるん

だ!」と思いました。そうした様々な職業の人々が、講義のあとの質疑で、「アートは社会に必要なのか?」「税金でやることなのか?」といった根本的な質問をするんです。財源の話も多い。美術館と違って、アートプロジェクトは、“ある”ことが前提ではじまっていないことに驚きました。後期課題は、アートプロジェクトの企画を立てることです。私たちのチームは、せっかくなので実施するところまでを目指しています。予定は2016年5月。いまは、その準備がとても充実しています。

02

矢作沙也佳さん
早稲田大学大学院
文学研究科博士2年



本業のスキルを活かしてできることが見えてきました

私は、機械工学系のエンジニアで、工業製品の設計をしています。自分の仕事について話すとアートとの距離があって驚かれるのですが、設計の仕事は大半が調整作業と言ってもよく、その点でアートプロジェクトと多くの共通項があることに気づきました。ひよんなきかけで参加をすることになりましたが、人生の転機となった1年でした。ここでのご縁をきっかけに、展覧会で使用する看板や企画会議で使う模型をつくったり、アーティスト

トの制作サポートをするなど、本業のスキルを活かしてできることも見えてきました。自分が見つけたものを人に喜んでもらうことは、本当に嬉しいことです。これからも、本業に軸足を置いた関わり方を深めていきたいと考えています。昨年、初めて知ることばかりで、インプットの年でした。2016年は、学んだことをアウトプットできるように、中央線沿いで活動する『TERATOTERA』のお手伝いを続けて行こうと考えています。

03

山上祐介さん
会社員



技術編

点ではなくて線として、ずっと考え続けている感じがありました

「アート＝名画」というイメージが強かったのですが、『瀬戸内国際芸術祭2013』に行った際にそれとはまったく異なる作品を体験して「アートプロジェクトって何だろう?」と興味を持ったのが受講のきっかけでした。技術編は、ディスカッションが中心です。社会人の方が多く「普段こういう仕事をしているからこう思う」という意見が飛び交い、そうした考えを調

整していくのは難しいものですが、学生の自分のなかにはないものなので、存分に吸収できたと思います。放課後の話し合いも多く、点ではなくて線として、ずっと考え続けている感じがありました。現在同世代の仲間と、地域とアートの関係性を「アートプロジェクト」という言葉を外してリサーチすることを始めています。春から社会人になりますが、これをライフワークにしたいと思っています。

04

平石直輝さん
立教大学コミュニティ福祉学部
コミュニティ政策学科4年



本業の仕事もおもしろくなってきていて、いい循環が生まれています

私は、アートプロジェクトを「見る」側から、「やる」側になりたい、と思い参加しました。入学前は、企画書や報告書の書き方を学ぶような職業訓練校をイメージしていたのですが、現場の声を聞ききすることで、そんなにすぐ身につくものではないということに気づきました。思考編は、どのようにアートプロジェクトや社会と向き合うかというマインドを学びました。技術編で印象的なことは、やはり演習です。課題設定が細かいので、同様に細部まで突っ込

まれます。例えば「そのアーティストは、先日の展示でこんなトラブルがあったが、それに対してどんな態度を取るのか?」「助成金は、どこからどんな文脈でとるのか?」など、リアリティのあるものです。難しさとおもしろさは、表裏一体でした。こうした刺激を日々受けることで、最近、本業の仕事もおもしろくなってきていて、いい循環が生まれています。

05

田村悠貴さん
広告制作会社ディレクター



つくるプロセスのなかで生まれるものに、意識を向けられるようになった一年でした

アートプロジェクトは、プロセスが大事です。そのつくるプロセスのなかで生まれるものに、意識を向けられるようになった一年でした。技術編では、別の職能、別の場所にいる人たちと限られた時間を出し合い「チームでやる」ということを学びました。自分が考えつくしたと思った考えも、ほかの人がポンとその限界を超えてくれたり、自分ができると相手ができることの差が見えました。このメンバーで真剣に議論できたこと

は、とてもいい経験でした。昨年自分のミッションの端を掴んだ感覚があり、2016年1月に『NPO法人Art's Embrace』を設立しました。コンセプトは、「わかりあえる入り口をつくる」。10名の設立メンバーには、学校の仲間に入ってもらいました。アートプロジェクトが社会福祉と融合して、新たな社会基盤をつくるのが目的。最初の仕事は、異なる背景や習慣を持つ人と出会う『TURNフェス』の事務局です。

06

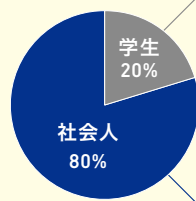
東濃誠さん
再開発プランナー



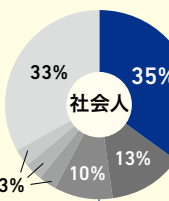
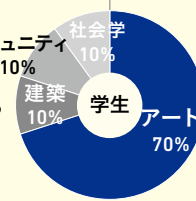
数字で見る受講生データ(2015年度)

受講生数
49名
うち修了人数
思考編:23名
技術編:11名
合計:34名

Q1 属性は?

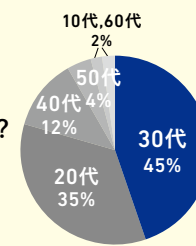


Q2 主な 専門分野は?

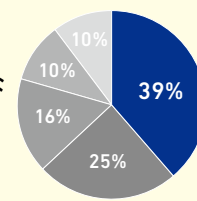


- アート
- 建築・街・コミュニティ
- 広告系
- サービス業
- 国際関係
- コンサルティング
- その他
- メーカー企画 / WEB媒体運営 / 映像機器等営業 / IT / 事務 / エンジニア / 税理士補助 / 整体師 / デザイン・設計 / UIデザイン / 看護師

Q3 年齢層は?



Q4 アートとの主な 関わり方は?



- アートの仕事をしている
- アートNPO / 地域NPO / 一般財団法人 / 公益財団法人 / 執筆・編集 / 技術 / 教職員 / カンパニー制作
- ボランティアをしている
- 生活と表現 / 明後日新聞社 / TERATOTERA / とびらプロジェクト / 黄金町エリアマネジメント

- センター / 千住だじゃれ音楽祭 / Art Bridge Institute / 六本木アートナイト / SLOW MOVEMENTほか
- 勉強している
- 青山学院大学 / 慶応義塾大学 / 日本大学芸術学部 / 国際基督教大学 / 早稲田大学 / 法政大学ほか
- 自主的な活動をしている
- 観客

図書室

教室には、これまでTARLが研究・開発した教材や、アートプロジェクトに関する書籍が1,000冊以上あります。

その一部をご紹介します。

01



02



03



01:東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことは。の本
森司監修／坂本有理、佐藤李青、熊谷薫編／2014年
アートNPO育成を通して蓄積された用語をまとめた、東京アートポイント計画の活動記録集。

02:アートプロジェクト運営ガイドライン一運用版

帆足亜紀編著／2013年
アートコーディネーターによる運営ガイドライン。プロジェクト運営の全体像を、流れに沿って把握できるガイドラインマップなど、実践的なツールが揃っている。

03:組織から考える継続する仕組み“アート”と“社会”が長くつき合うためのインフラづくり

帆足亜紀編著／2014年
アートコーディネーターの「続ける」という問題意識に立脚した、組織の視点からアートプロジェクト運営を考えるための一冊。02の副読本でもある。

04:墨東のまちとアートプロジェクト

—墨東まち見世2009-2012ドキュメント
墨東まち見世編集部編／特定非営利法人向島学会「墨東まち見世部会」／2013年
2009～12年にかけて開催されたアートプロジェクト「墨東まち見世」の活動報告集。どのような人がどのような思いで行ったのか、現場の声とプロセスが綴られている。

05:アート・アーカイブ・キット

アート&ソサイエティ研究センター編／2014年
アートプロジェクトのアーカイブを実践するためのプロセスや、記録整理のためのスキルをシンプルにまとめたキット。

06:地域におけるアートプロジェクトのインパクトリサーチ

「苜平の事例研究」活動記録と検証報告 概要版
特定非営利活動法人 地域文化に関する情報とプロジェクト[NPO recip]編著／2014年
アートプロジェクトの長期的な成果を検証するために、新潟県 苜平集落で続く『明後日新聞社文化事業部』の調査結果をまとめた報告書。

07: An Overview of Art Projects in Japan: A Society That Co-Creates with Art

熊倉純子、長津結一郎編著／Art Translators Collective編／2015年
日本国内のアートプロジェクトについて、事例と理論を交えて網羅的に論じた『日本型アートプロジェクトの歴史と現在1990年→2012年』のエッセンスをまとめた英訳本。

*発行は、すべて公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室(現アーツカウンシル東京)です。

04



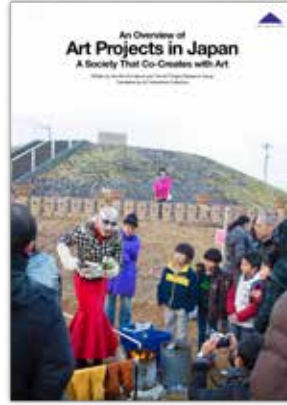
05



06



07



Toyo Art Research Lab

「思考と技術と対話の学校」

基礎プログラムガイド

監修

森司 [アーツカウンシル東京]

制作・執筆

坂本有理、佐藤李青、嘉原妙、古屋梨奈 [アーツカウンシル東京]

橋本誠、及位友美、阿比留ひろみ、坂田太郎

[一般社団法人ノマドプロダクション]

編集

川村庸子

アートディレクション・デザイン

加藤賢策、内田あみか [LABORATORIES]

写真

加藤健、川瀬一絵

印刷

山田写真製版所

発行

アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28

九段ファーストプレイス8階

TEL:03-6256-8435 FAX:03-6256-8829

URL:<http://www.artscouncil-tokyo.jp>

発行日

平成28年3月23日

TARLの各プログラムについてのお問い合わせ先

TARL事務局(一般社団法人ノマドプロダクション)

e-mail:info@tarl.jp tel:080-3171-9724 fax:03-6740-1926

Tokyo Art Research Lab (TARL)とは

アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、ともにつくりあげるリサーチ/人材育成プログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことによって、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。

<http://www.tarl.jp>

